

紙と書籍

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

パソコンが普及し始めたのは1980年代初頭だろうか。筆者がドイツで1年余り滞在した折、データ整理にUNIVACの大形計算機を用いていた。何のことはない四則演算とグラフ描きに利用していただけであるが、帰国して大学の研究室に戻ると、学生がPC-8001でインベーダゲームをしていた。その頃の記録媒体といえばカセットテープだったが、8インチのフロッピーディスクになるとその後5インチ、3.5インチと小型化し、次いでMO、CD、DVDやモバイルハードディスク、さらにはUSBフラッシュメモリとなった。そして最近ではクラウド、すなわちデータをパソコンやハードディスクに溜めておかずネット上に置いておいて使用するときアクセスするスタイルが主流である。この流れに伴い、パソコンの記憶容量は言うまでもなく昔のk（キロレベル）に比べれば今やG（ギガレベル）で6桁も大きくなってはいるが、外付けのメモリなどは持ち歩かないようになった。それほどデータ（筆者などのデータは実は役に立たないものも少なくないが）の量が増えており、対応して記録媒体の容量も増えてきたということだろう。しかし我々の日々の生活を考えると、少なくともこの数十年ほとんど変化していないように思われる。先日、電車のQRコード付き1-Dayチケットを手に入れるべく、スマホでバタバタしてなんとか支払いをし、あとは使用するだけの段階までこぎつけたが、駅員さえおれば紙1枚ですむのに…とため息をついた。何を無駄に電力と時間を浪費しているのか。このような不便をDXというのだろうかと思うのは筆者のやっかみか。

さて件の記憶媒体であるが、今使っているパソコンではフロッピーもMO、DVDはもちろん、モバイルハードディスクを差し込むべきスロットさえない。つまりはかつてのデータを読み込むには外付けのデバイスが必要というわけである。筆者も大学を退職する際に山のような研究資料、主として関係論文をほとんどすべてPDF化してハードディスクに収納した。自身の論文も同様である。大学の研究室と違って自宅で筆者に割り当てられた空間は4畳半であり、そんなに多量の紙屑ともいえる論文資料など置くスペースがないからである。こうしたデータを利用するのは筆者が活動している間のことで、それを過ぎたらゴミになればよしと思っている。その一方で、在職中に集めた筆者の専門に関わる洋書、和書などは可能な限り持ち帰って本棚に並べており、家族には、然るときがくればせめて一度は古本屋を呼んでねと言ってある。

こうした我が蔵書の中にはかなり古いものも多数ある。筆者の専門であるボイラ関連技術や鉄鋼技術が大きく展開したのは1800年代だが、1820年頃に出版されたドイツ語の資料などは、すでに200年ほど経っているがいまだに健全であり、髭文字と呼ばれる独特の書体には苦勞させられるがちゃんと読める。これは紙と印刷技術の重要な点である。紙質や製本技術が稚拙であると、書籍は破れたりバラバラになったりしてしまう。ボイラ資料でいえば筆者が持っている菅原菅雄先生の1939（昭和14）年の書籍はまだ製本も紙質もマシで、1944（同19）年刊行のDickinsonの訳本『蒸氣機關發達史』（山川敏夫譯）などはぼろぼろで開く

たびに紙片があたりに散る。下手にコピーもできないので、袋に入れて日光に当たらないように保存している。戦後の1948（同23）年に出版された蒸気機関に関する書籍も酸性紙なのか、丁重に扱わなければ破れてしまう。ドイツの状況を見れば、第1次世界大戦敗北後の1920年代初頭においてさえ紙質も製本も問題なく、しっかりした書籍を出版していた。しかし、1949年に発刊されたMünzingerのDampfkraftの第3版では、紙質や製品はかなり悪く、数種類の紙が混じって用いられてさえいる。もっともこれには、敗戦後の都市部では食品、衣類はおろか家屋さえもままならない時期に何とか書籍を出して次世代の人材育成に尽くそうという心意気を感じられ、ある種の感動を覚えた。片や我が国で、1943年（同18）年12月、戦局も悪化し始めていた時期に出版された『航空発動機』（富塚清編著）などはやたらしっかりした紙質で製本も良い。すでに傾きかけた日本の航空戦力増強と人材育成への寄与として出版された、その意味は分からないでもないが。

このように本の紙質と製本の様子から出版当時の様子がなんとなく見えてくる。無味乾燥な数値ではない「もの」として残ること、残す意義。それらを、DXとAI花盛りの今だからこそ改めて考えることが必要なのではないか。

